

冬の教育研究発表会振り返り

第2学年算数科「かけ算」

授業者 松原千夏

本時の主張点

自分の考えを友達に伝えたり、友達の考え方を説明したりすることで、いろいろな見方・考え方があることに気づき、まとまりを足したり引いたりして主体的・協働的に考える姿が見られるだろう。

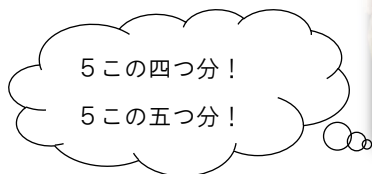
1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの探究

本時における授業づくりの「しかけ」

子どもたちの考えの中から、まとまり同士を足す考え方を取り上げ、「一部がなくなっている図も、まとまりを作って足せば総数を求めることができる。」と確認する。導入で全体を見せ、そこから一部がなくなっていることを意識づけておけば、「引く方法もある。」といった反応がでるだろう。本時ではそこを「しかけ」とし、一つの図から様々な見方・考え方があることに気づかせる。

◎図の一部がなくなっている問題に出会う

箱の中にはみかんが全部入っているだろうと予想する子どもたち。

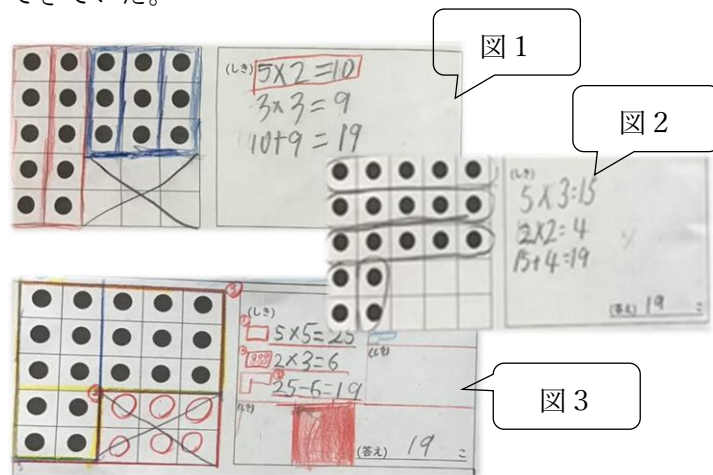


少しずつずらしてまとまりを意識させたことで、一部が欠けている場面でも5このまとまりに目を付けて考えることができた。

◎足す考え方・引く考え方

図を分割してから足す方法で考えた子どもが26人、全体からない部分を引いて考えた子どもが3人だった。

どちらの考え方も、これまでのかけ算学習で身に付けた力を活用し、「まとまりをつくる」ことができていた。



2. 本時における子どもの評価活動

本時における子どもの評価活動

どの考え方が分かりやすかったのか考察・評価させることで、これからの学習で同じような問題場面に出合ったとき、多様な見方・考え方ができることに気づき、どの考え方が問題に適しているのか考えられるようにする。

どの考え方が分かりやすかったのか番号(図1, 図2, 図3)を選ばせ、なぜそう思ったのか振り返りを行った。

図	1	2	3	2・3
人	5	1	21	2

番号を整理してみると、図3を選ぶ子どもがほとんどであったが、まとまりを選んだ理由と関連づけて振り返りをしていた子どもはあまり見られなかった。授業の中で、教師側から「まとまり」という言葉を使って説明する場面はあったが、子どもたちの言葉になっていなかったのだと感じた。授業の中で、子どもたちなりの言葉や表現を「まとまり」とつなげて説明させていけば、今後の学習につながる授業や振り返りになったと考える。

3. 本実践を振り返って

本実践では、単元を通してまとまりをつくることを意識づけて指導してきた。今回の授業では、まとまりをつくって考えるという成果は見られた。しかし、「ないところをあると見る」ことは2年生にとって難しく、数人の子どもが理解しきれていなかった。全体のまとまりからない部分を引く方法を考えやすくさせるために、式をヒントにするのではなく、具体物を用いて演じさせたり、図を手がかりにさせたりして、引き算場面を連想しやすくする手立てが必要であったと感じた。そうすることで、本実践の主張である、「自分の考えを友達に伝えたり、友達の考え方を説明したりすることで、いろいろな見方・考え方があること気づける子ども」にさらに迫ることができると考える。